＜岐阜県安八町における取組＞

【統合困難な地域における教育環境の充実の取組モデル】
〇個人カルテ等を活用した個に応じた指導及び他校や地域との交流活動を充実させた例

１．市町村の概要

◆人　口：15,115 人（平成 30 年１月現在）

◆小学校：３校，児童数　923 人　　◆中学校（組合立含む）２校，生徒数　632 人

※学校数，児童生徒数は平成 29 年５月１日現在

◆市町村全体の学校の統合・存続の状況

安八町には小学校３校，中学校２校（うち１校は大垣市・安八郡安八町組合立）がある。小学校３校のうち２校はいずれも全校児童が 300 人を超え，調査研究対象校の安八町立牧小学校の児童数は 91 人の小規模校である。本町では平成 27 年 10 月に「安八町まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定するなど，人口増加策を踏まえた学校存続を方向付けて町行政を推進し，小規模校のメリットを最大限生かした教育活動の推進を図っているところである。

２．研究タイトルと研究課題

◆研究タイトル

確かな読む力を身に付け，自らの考えを豊かに伝え合う子の育成
～個に応じた指導・援助と豊かに伝え合う交流活動の工夫を通して～

◆研究課題

（１）小規模校のメリットを最大化させる方策
　①徹底した個の見届けと個に応じた指導・援助の工夫，指導改善サイクルの確立
　②家庭，地域とつながり，豊かに伝え合う力を育む読書活動の工夫
（２）小規模校のデメリットを最小化させる方策
　①郷土愛を育み，豊かに伝え合う力を発揮できる他校の小学生との交流活動の工夫
　②豊かに伝え合う力を発揮できる地域の方との交流活動の工夫

３．調査研究対象校の状況

◆調査研究対象校

安八郡安八町立牧小学校（６学級 91 人）

◆調査研究対象校を存続することとした背景・理由

本牧地区は，揖斐川沿いの輪中地帯で畑作農業地域と住宅地域が混在している。畑作農業地域が多いため，新しい住宅が建つことは少なく人口も減少しつつあるが，地域の住民は，学校の教育活動に協力的であり，「地域の学校」としての意識が強い。

また，これまで町として人口増加策を踏まえた学校存続を方向付けて，町行政が推進しており，平成 28 年度は 86 人だった児童数が平成 29 年度には 91 人と増加している。

◆調査研究対象校における地域との連携の状況

区長会，長寿会の指導・協力の下，地域の特色である農業活動（古代米，野菜等）を行っている。区長会と連携して行事，活動に取り組むことで，三世代交流，地域の活性化にもつながっている。

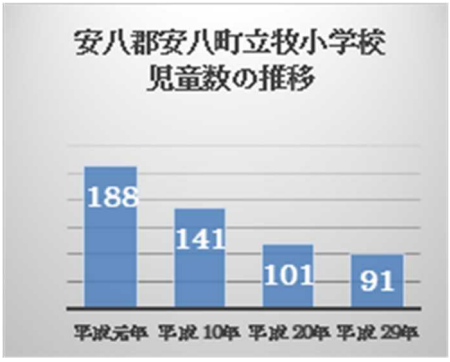
◆児童生徒数を確保するための工夫

◇魅力ある学校づくり
　・少人数指導の充実による学力向上
　・教育課程の見直しや魅力的なカリキュラムの導入
　・読書離れを防ぐための図書館活動の充実
◇地域との交流の場づくり
　・密接なつながりを活かした校外学習・体験活動の充実
◇市街化区域の指定拡大による住宅誘致
　・自然減少をゆるめる転入人口の増加

◆調査研究対象校の位置

東は羽島市に，西は大垣市に接した町である。長良川・揖斐川にはさまれた肥沃な農耕地に恵まれ，穀倉地帯の一部を形成している。

◆対象校の児童数の推移

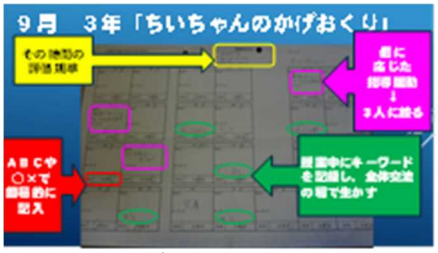


４．本調査研究において取り組んだ内容

【小規模校のメリットの最大化】

◆個人カルテを活用した個に応じた指導の充実

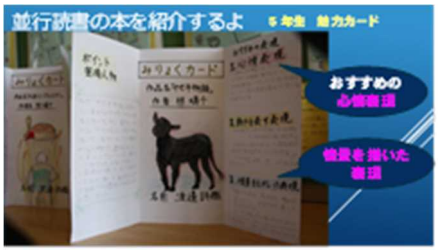
単元で付けたい力を確実に身に付けさせるため，個人カルテを作成した。個人カルテには，本時の評価規準と達成状況を記録するとともに，次時の課題が予想される場合にはどのような指導を行うかを具体的に書き出した。教師は個人カルテを基に授業に臨み，個の学びを徹底して見届けるようにした。



個人カルテ

◆読書活動を通じた地域や家庭とのつながり

読書活動は牧小学校の伝統であり，従前から国語科教材と関連させた読書活動（以下，並行読書と表記）を行っている。牧小学校の伝統をさらに拡大するため，並行読書の本を家庭，地域の方，他校の児童に紹介する表現活動を意図的に設けた。そのほか，PTA と連携した家読にも取り組んだ。



並行読書の紹介

【小規模校のデメリットの最小化】

◆他校の小学生や地域との交流による表現力の育成

他県の小学生や地域の方々との交流や，同じ町内の小学生と遠隔システムを活用した合同授業を実施することにより，積極的に他者と関わったり，自らの考えを豊かに表現したりできる児童の育成を図った。

（福井市立越廼小学校との「すいせん交流」）

福井市立越廼小学校と交流活動を行った。交流活動は，事前に遠隔システムなど ICT 機器を使って自己紹介等を行った上で，越廼小学校児童を安八町に招いたり，牧小学校児童が越廼小学校に訪問したりし，自然体験や郷土学習を行った。

越廼小学校との「すいせん交流」

（３校合同ビブリオトーク交流会）

遠隔システムを活用して，安八町内の名森小学校，結小学校（いずれも 300 名以上，各学年２～３学級の中規模校）の３校でビブリオトーク交流会を行った。

（長寿会，区長会等との交流活動）

長寿会や区長会等の地域の方との交流を生活科，総合的な学習の時間で行った。これらの交流活動を，自分の考えを豊かに伝え合う力を発揮する場と位置付け，区長会と語る会では国語科の学習内容と関連付け，児童は地域のあいさつを活発にさせる提案やこんな牧地区になってほしいといった牧地区の未来に向けた提案をした。

区長会との交流活動

５．研究の成果と今後の取組

◆研究の成果

（個人カルテ）個人カルテの活用により，個に応じた効果的な指導を行うことができた。個人カルテは単元末テストも一定以上の得点をあげる等，単元で付けたい力を身に付けさせるのに有効であった。個人カルテは，大規模校と比べて作成がしやすく，小規模校のメリットを最大化させるために有効な方策であった。

（読書活動）地域を巻き込んだ読書活動を行うことによって「読書に親しむ牧小校区」となりつつある。また，並行読書の本を紹介する表現活動を通じて，児童は大勢の前で自信をもって話すことができるようになった。

（交流活動）表現活動を主軸にした交流活動は，児童にとって豊かに伝え合う力を一層高める機会となった。あわせて，他県の小規模校と交流活動を行うことによって，児童は郷土に誇りをもつとともに，視野を広げることができた。また，同一中学校区の小学校との交流を通じて，中一ギャップを軽減することになった。そのほか，地域との交流を通じて，地域の一員としての自覚を高めることもできた。

◆今後の取組

少人数だからこそできる個に応じた指導の充実，地域との交流活動の充実といった小規模校のメリットを最大限に生かした教育活動を推進することによって，小規模校を存続させていきたい。

６．学校の存続に課題を抱える自治体へのメッセージ

小規模校の活性化を考える時，隣接する学校や地域との交流活動を充実させれば，小規模のデメリットを克服することができる。とりわけ，地域との交流活動は，少人数だからこそ，一人の児童と地域の大人が関わる機会は多くなるため，思いやり，感謝，郷土愛，奉仕といった児童の非認知能力を高めることができる。

また，小規模校だからこそ個人カルテを作成することができ，個に応じた効果的な指導によって個の学びを徹底して見届けることができる。